



厦門と廣東
南京と漢口

特252
795

88
乙

廣東婦女維持會の行

3
5



0000211-000

特252-795

厦門と広東南京と漢口

南洋協会

昭和13

AAB

特 252
795



目次

- 一、右手で戦ひ左手で建設……………一
- 二、占領二ヶ月の廣東市街……………三
- 三、復興は先づ治安の回復から……………七
- 四、交通機關の復舊と日本語熱……………一〇
- 五、厦門の治安は完全に回復した……………一三
- 六、南京の復興と揚子江岸……………一五
- 七、同胞を殺す支那の逃避兵……………一六
- 八、如實に見る支那の特殊性……………一六

厦門と廣東・南京と漢口

發行所寄贈本

一、右手で戦ひ左手で建設

最近中支方面を視察して來た旅日華僑聯合會長張則盛氏の話によると、支那の新聞紙は毎日のやうに「廣東を奪回した」の「何處で日本軍を撃破した」のといふ失地回復の記事を掲げてゐるので、無智な民衆は、このデマ記事に欺かれ、日本の大勝利を信じないのがあるさうだ。然しながらデマをもつて欺き得るのは愚民だけである。廣東が陥落し、武漢が我手に歸してか



燒野原から復興した南京中華路の賑ひ



復興を目指す漢口商店街の布告

日華區

民生路江邊以上沿中山路民族路直抵集稼嘴河邊以下地帶住民均屬日華區

商業區

中山路直抵民生路河邊以下地帶住民均屬商業區

らは先づ第一に列國の態度が變つて來たし、支那の國民も事變の成行について再認識をする者が漸く多くなつて來た。

彼等を考へさせるのは占據地における日本軍の涙ぐましい復興建設の努力であらう。

凡そ東西の歴史に残る古今の戦争は、何れも敵國の首都を攻略して城下の盟ひをさせることを目的とし、それがためには總ゆる破壊殺戮が行はれ、而もその跡始末は戰敗國に負擔せしめ、攻略者は“後は野となれ”の態度を取つてゐた。之れが“戦争は破壊なり”の成語を生むに至つた所以である。然るに今度の事變における皇軍は、右手に敗殘兵と戰ひつゝ、左手で難民を救濟し、彼等の樂土建設を急いでゐるのである。

東 廣 東 復 興 策



皇軍よ白米の配給を受け、漢口難民

聖戰の意義茲に在りとしても、第一線將士の勞苦、國帑の需要消耗は從來の戦争の比でない。然しその勞苦は酬ひられつゝある。厦門の復興、廣東の秩序回復、漢口の和平再現など何れかその結果ならずとしない。斯うした事實は總ゆるデマを無言で粉碎してゐる。

二、占領二ヶ月の廣東市街

廣東が陥落したのは十月二十一日である。もう直ぐ二ヶ月になるが、支那軍のため、行きがけの駄賃に破壊された市街は、敗殘兵の出沒に妨げられて復興が容易でない。

我軍占領當時の廣東は、商取引が杜絶してゐたので、總ての物資が極度に不足し、折角

歸つて来た避難民も食ふに糧なく、着るに衣なしの有様だつたから、日本軍は十一月六日から、中華北中路と惠愛中西路、西華路、光復北路、光復北中路と龍津東路、光復中南路と九甫路の各十字街で米、鹽、砂糖、その他の日用必需品を廉賣し、購ふに錢なき窮民には、我兵士が自分の食糧を分け與へた。その場の光景を東京朝日新聞の現地特派員は斯う報じてゐる。

「毎朝九時頃になると廣東の街角には何十人といふ市民たちが集つてワイワイわめき始める、老婆や子供が手に手に箆を掲げてゐる。それは我部隊の勇士から情けの残飯を貰はうとする大廣東市民の哀れな姿である。

残飯の箱が昇ぎ出されるとワーツとばかりに押寄せて死者狂ひの争奪戦が始まる。子供は泣く、老婆はわめく、押合ひ、ヘシ合ひ、一粒の飯を争ふ彼等。地上に落ちて砂にまみれた飯粒をそのまゝ掻き集めて拾つて行く争ひ疲れた老嫗の姿。一國の統治者の間違つた政策が、斯うも惨めな悲劇を生むものか！」

また同特派員はこんなことを書いてゐる。

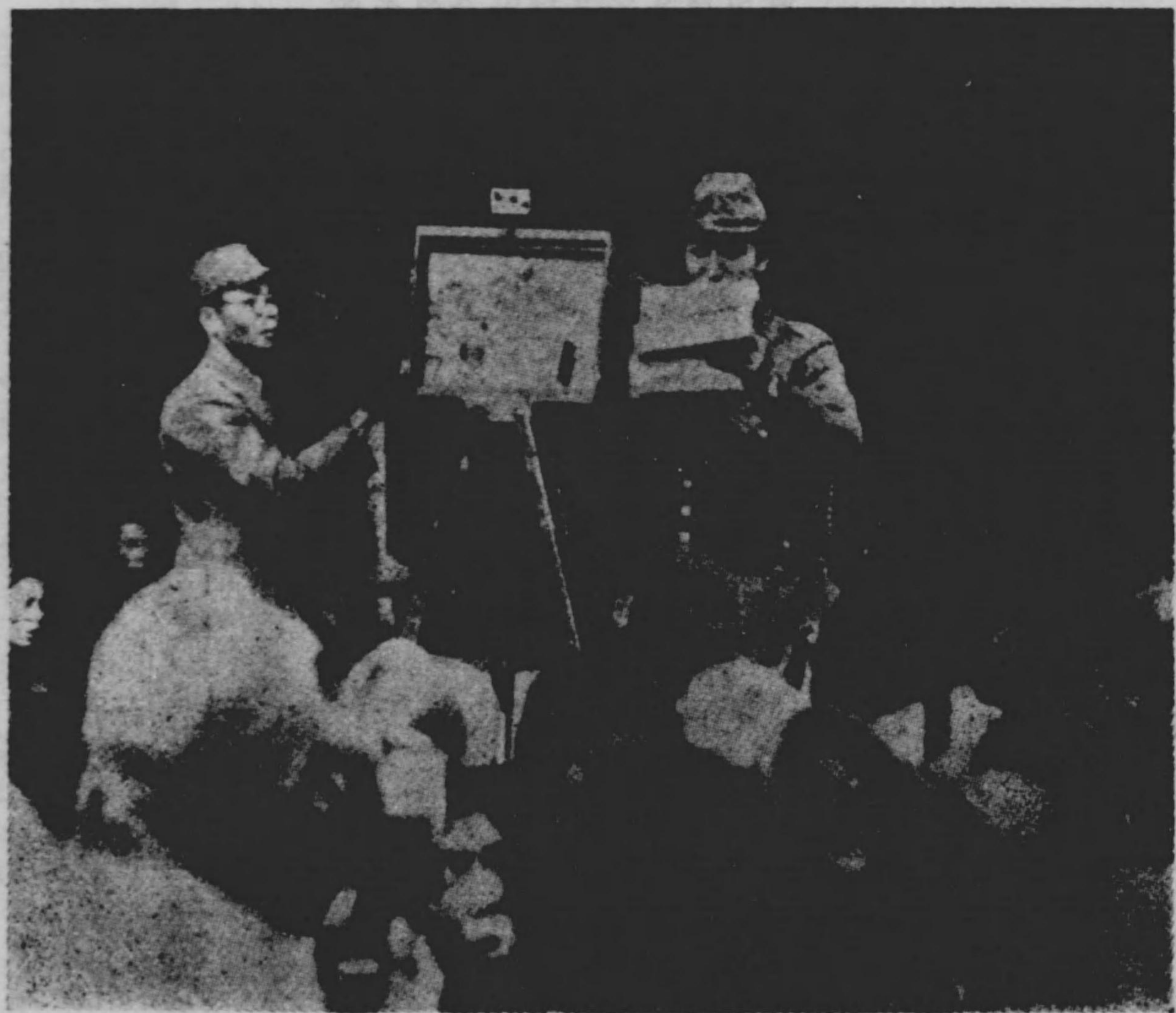
「我宣撫班が廣東の目抜き街福興路で紙芝居をやつた時のことである。周達雲(二七)といふ廣東生れの青年が、俄作りの壇上から群集してゐる市民に演説し始めた。

「我々は歴代の支那軍閥のため裸にされ、善隣日本の友情を失ひ、今また路頭に飢ゑを訴へねばならぬ運命を背負つた。すべての財、すべての生活を奪はれて後に酬ひられたものがこの悲運である。」

この演説半ばに聴衆の中から號泣の聲が聞え始めた。見ると一人の老婆が眼を泣き腫らして叫んでゐるのだ。

「今の演説の通りです。私は一人息子を無理から兵隊に取られたが戦死した。何處でどんな死に方をしたのやらその通知さへもない。私は一人ぼつちになつてこの通り食ふものさへない。家は支那軍隊のために焼かれた。税金だ、獻金だと絞

紙芝居で市民保護の街頭宣傳





廣東婦人維持會の宣傳活躍

られた揚句が之れた。蔣委員長の嘘つき奴！
老婆の泣聲は激怒にふるへてゐた。」

廣東の街の要所々々には檢問所といふ昔の關所のやうなものが出來てゐて、此所を通る一般市民を日本の兵隊が檢査する。治安を維持するためには怪しい荷物や、武器類の有無を取調べるのである。斯うして調べて見ると十人のうち八人までが泥棒だといふが、斯うした混然雜然たる中に市中の各所には自治委員會が結成され、廣東自衛團聯合會が組織され、婦人の治安維持會が設立された。廣東に婦人維持會が結成されたのは十一月十四日である。同會は市内維新北路南新巷三十五號に事務所を設け、十二月の四日午後一時から中山

記念堂で盛大な結成式を挙げた。會長に元廣東法院の婦人書記石應蓮(二八)が推されて就任、直に「萬歲携同親善中日婦女」「打倒自私自利的政府」の街頭宣傳に、ビラ撒きに活潑な運動を開始した。

三、復興は先づ治安の回復から

戦禍を避けてゐた廣東西方地區の住民も治安の恢復に伴つて續々歸來し、十一月八日に早くも鹽歩に、また同十一日には廣三鐵道五眼橋驛の北方瀆邊を中心とする六ヶ村に自治委員會が結成された。

復歸する市民が漸く増加するにつれて、各街坊を中心とする自衛團が續々組織され、今はその數も百數十を算するに至つたので、十一月十七日之れ等の自衛團代表により「廣東自衛團聯合會」が組織された。この聯合會の代表には國民革命軍第八路の中佐參謀を勤めた現阿片區取締蘆光子氏を推し、市内を二十五區に分ち、これから代表一名づつ、を選出して會議制を採ることとし、事務所を差當り大德路に在る蘆氏の自宅に置くこととした。廣東の復興はこれ等の自衛團を基礎として力強き歩を進め、既に漢字新聞「廣東迅報」なども發行され



避難民の復歸せしめんとす廣東市街

て、文化的復興の黎明を告げてゐるが、十二月八日に至つて元第四軍團總司令部中將呂春榮氏は全市自衛團聯合會を更に治安維持會に發展せしむべく、廣東治安維持會準備委員會を組織し、二十日完全にその組織を終り、彭東原氏を委員長に、呂春榮氏を副委員長に、商衍鑒、廖銘、卓球、陳紹唐、梁永棟氏を委員に挙げ同日中山記念堂で盛大な發會式を舉行すると同時に全國に散在する廣東人に向つて左の通電を發し、廣東人の廣東の復興を目指して市街の再建工作に努力する傍ら難民の復歸促進運動を開始した。

通電内容

我廣東省は不幸にして過去七年間に互り黨魔茶

毒に會ひ人民は物業を摧殘され、骨肉髓脂まで搾取されたり、初めは三民主義、五權憲法の名に託し、ついで隱に共產黨と結びて私を營み、苛政は誠に猛虎よりも甚だし、民衆を愚弄すること古より未だ聞かざるところなり、幸ひにして大日本帝國同種民族の淪亡を見るに忍びず大義我を助くるために軍を南下せしむ、然も秋毫も犯すところなし、廣東の黨政要人は力敵する能はず逃亡したるが市を去るに際し兵に令して焚燒掠奪せしめ、ために全市の精華悉く灰燼に歸す、我等この慘状を見るに忍びず特に廣東治安維持會を設け公道を守り、治安に任じ同心協力して能ふる限りの恢復をはかり、民をして水火の苦しみより蘇へらしめんとす、而して日本帝國と提携して永久的親善をはかり模範的大廣東をつくり干戈を變じて玉帛となさんことを期す、國內の同郷諸卿この旨を體せられむことを

四、交通機關の復舊と日本語熱

治安の回復維持に缺くべからざるものは交通機關の復興である。戰禍のために破壊された道路や鐵道は、皇軍晝夜兼行の努力によつて日に日に復舊されてゐる。

廣東石龍間鐵道 沿線到るところ破壊され、全く不通となつてゐた廣九鐵道は、我山田部隊の手によつて十一月五日から廣東及び石龍間の二十里が復舊した。

廣東石灘間鐵道 また同廣九鐵道の廣東及び石灘間十五軒九の補修作業も我工兵隊の手によつて完成



佛山の日本語教授所

され、十一月十八日から定期運轉を開始した。

廣東佛山間自動車道

路 廣三鐵道の西北側を廣東より佛山鎮に通ずる約七里の自動車道路は、支那軍が敗走の際途中十三ヶ所の橋梁を焼却又は爆破した爲め不通となつてゐたが、我軍の復舊工事により十一月八日全橋梁を修理完成、廣東及佛山間自動車の連絡が成

つた。

廣東から西に五里餘り行くと佛山といふ町がある。廣東省第二の都會であり、廣東よりも古い歴史をもつ華僑の郷里として有名な町だ。之れは我南支軍が血ぬらずして占領した町だけに復舊も速く、三十萬の住民は既に二十萬近くまで歸來し、電燈も點灯され、青物や肉類などの食料品市場を始め、一般の商店も賑かに營業をやつてゐる。

この町の自治委員會は、町の徳望家可徳順氏を中心として南支中第一番に組織された。

委員會には専任の警官も居り、十一月一日から日本語學校なども開校され、「日支親善は言葉から」といふので、同地の日本語熱は旺んである。

五、廈門の治安は完全に回復した

わが海軍が廈門に日章旗を樹てたのは本年五月の始めであつた。蔣政權の要人居正を父に持つ張鳴氏が治安維持會を結成し、會長代理となつて日夜全島の復興に奔走してゐるので、占據以來僅々六ヶ月で治安全く回復し、島民は陸續と歸つて來て市中目貫の大淡路、大公路のメイン・ストリートは殆んど開店し、支那人經營の二大デパート南泰成、永康成も營業し

て居り、支那商人は、在留邦人に負けるものかと言はぬばかりに張り切つて復興に努力してゐる。

十一月末厦門に治安維持會を訪問した中外商業新報記者は左の如く張會長の談話を通信してゐる。

『陸戦隊の方々が我々の誠意を掬んで占據と共に米鹽一切を寄附して下すつたので、島民は非常に喜んでゐます。我々も之れには心から感激して日本軍のためなら敢て身命も厭はぬと云ふ覺悟をしてゐます』

日本人を妻にもつてゐるからと言つて、あらぬ漢奸の汚名を被せ、投獄したり財産を沒收したりしてゐる蔣政權と、敵軍の要人を父にもつ人を援けて難民を救ひ、感激の涙に咽ばせてゐる日本軍とは、寛嚴兩極端の好對照である。

十二月の初め厦門から歸つた海軍陸隊戦の多田野佐七郎中佐は、厦門の現状を左の如くに語つた。

『我軍の規律嚴正に安心し、難民は續々歸つて來て事變前の人口に近づいてゐる。漢口、廣東の陥落以來抗日はその跡を絶ち、日本語の講習が盛んになつた。我軍は臺灣、ビルマ、シヤムなどから安い米を輸入して民衆の生活を樂にするやう努力してゐるが、治安維持會の實力が加はるにつれて、眞の樂土が實

現されつゝある。』

六、南京の復興と揚子江岸

南京が陥落してから早くも一周年を迎へた。日本人が入城した當時は十數萬に過ぎなかつた市民も、今は六十萬になり、尙日々二三千人づゝの歸還者がある。之等の住民は皇軍の力強い保護の下にスツカリ元氣を取戻し、嬉々として復興に努めて居り、特に維新政府成立後の人心安定と復興ぶりは著しく、今春まで燒野原で人影一つ見當らなかつた中華路、建康路あたりも、今では店舗軒を並べ、事變前に優る賑ひを呈してゐる。

中支の皇軍將士を慰問して十二月八日に歸京した東京日日新聞社の取締役會長高石眞五郎氏の話によると、支那軍が退却の間際に全部燒却したと傳へられた南京市街は、行つて見ると大部分が残つて居り、燒かれたといふのは何割といふ程度に過ぎない。尤も事變前百餘萬と言はれた南京の人口はまだ六十萬ぐらゐしか戻つてゐないが、然し毎日二、三千人づゝの歸還者があり、若しそれ揚子江を遡つて懷寧、九江、漢口に至るならば、その沿岸は到るところ綺麗に耕されて農民の復歸樂業してゐることを語つてゐるといふ。支那の農民は總人口

の九割を占め、その物産も九割は農産物である。その農民が皇軍の占據地に歸つて來て生業にいそしんでゐることは、取も直さず我國の經濟的建設が成功しつゝあることを語るものである。高石氏の談話を裏書するものは、最近東京日日新聞紙上に寄せた英人バトリック・スミス氏の「中支印象記」である。スミス氏は歐洲大戰當時從軍して拔群の戦功を表した陸軍大尉だ、印象記の概要を摘記する。

『私は今蘇州、武穴、南京、蕪湖、歩昌、漢口、漢陽を三週間に亘つて視察し、その生々しい印象をみやげに持つて上海に歸つたところだ。私の眼に焼付けられた映像の數々は正に驚異の連続である。』

まづ最初の驚異は蒋介石の「焦土抗戰」が飛んでもないデマであるといふことだつた。この「焦土抗戰」といふ言葉は英雄的な響きを傳へるが、上海を出て十哩と行かぬうちに私の眼前には見事に耕された農園が見渡す限り展開された。上海を西に遠ざかるに従つて支那人の農耕地が殖え、揚子江の沿岸一帯に亘つて支那の農民は既に彼等の「善き大地」へ復歸してゐるのを發見した。』（下略）

七、同胞を殺す支那の逃避兵

スミス氏はその印象記の中に更に重大なことを記述してゐる。

『支那の農民の大部分は、支那兵に對して紛れもなく深い反感と憎惡の眼を向けてゐる。支那の逃避兵が日本軍の眼をくらすために、農夫を殺して、その衣服を着かへ、死骸に自分の軍服を着せ、證據を煙滅するために農夫の家族を皆殺しにして沼澤地へ投げ込むことは隨所に行はれ、少し調べられると忽ち化けの皮が剝がれて銃刑に倒れるのを私は幾度か目撃した。』（中略）

スミス氏の印象記はまた日本兵が支那農民の子供と一緒に菓子を食べてゐる和やかな情景を敘し、進んで蔣政權の抗日ナシヨナリズムの普及が馬鹿げたデマであることを指摘し、一轉して北支臨時政府と中央維新政府の聯合委員會開催祝賀會の模様を左の如く書いてゐる。

『私は今度の旅行中南京鼓樓で臨時、維新兩政府の聯合委員會第二次會開催の祝賀會を催してゐるところへ行き合せて。正直なところ私は支那人が三、四百人も集まるだらうかと危ぶんでゐた。そして少なくとも三、四百の日本兵が秩序の維持を保つために出動し、梁鳴志維新政府行政院長の身邊を警戒することであらうと豫期してゐた。ところが鼓樓へ近づいてビックリした。廣場には何萬といふ支那人の群衆が集まり、私達は大分遠くで自動車を降り、群衆の中を縫つて徒歩で式場へ辿り着かなければならなかつた。女や子供までが手に手に五色旗を握つて何時間となく祝賀の行列を組んで練り廻つてゐるではないか。私は鼓樓丘に集まつた群衆の數を概略十萬と見て取つた。花火の音と歡聲とは何の淀みもなく群衆の浮き立つた氣分を載せて空を揺がせてゐた。この廣場に日本の軍隊は少しも見當らなかつた。』

八、如實に見る支那の特殊性

今度の事變は蔣政權に取つて生死を賭けた一かバチかの大勝負である。而もこの大切な場合に支那軍首脳部が例の收賄癖を發揮してゐるにはあきれざるを得ない。それをスミス氏は斯う書いてゐる。

『蘇州といへば上海と南京の中間にある要都であるから、町はさぞかし支那軍の“焦土抗戰”の猛火に逢つて跡形もないだらうと思ひの外、行つて見ると事變前三十萬だつた人口は四十五萬に殖え、商店街には貴金屬店の窓に銀製器がまばゆい程並べ立てゝあるし、呉服店には艶麗な絹布が店一パイに擲げられてゐるではないか。あちらこちらでいろいろな支那人に訊いて見ると、支那軍が退却する時、町の商人たちが金を出し合つて賄賂とし、商人の代表と支那軍首脳部が城外で會見の上“焦土抗戰”臨時修正の妥協が成立したので、町は戦火を免れたのだといふことだ。

その點で南京の支那商人は可哀さうであつた。商人たちは市街戦免れ難しと見て、早くから家財を纏めて避難した。支那軍部は何時もの當てがはづれた意思ばらしに彼の華麗殷盛な商業中心區域中山路を根こそぎ破壊して行つた。商店街だけがあのやうな慘狀を呈し、國民黨政府の建物やその他がそのまゝ残されてゐる現状は、この間の消息を雄辯に物語つてゐる。

長沙の商店街も同様の憂き目に遭つたが、漢口の商店街は一風變つた方法で危難を免れた。それは有名な宣教師ジャキノ一師が支那罹災民救済の目的で米國から集めて來た巨額の金を提供して武漢支那軍首腦の將軍四人を説得し、焦土抗戰の手加減をさせたのが真相のやうである。私はこの宣教師の處置を氣高い行爲として大に賞讃する。だがその氣高い行爲の相棒は、何といふ穢らしい見下げ果てた腐敗漢であつたことか。(中略)

南東陥落直後に蔣政權びいきの外國新聞が傳へた反日デマの一パーセントだけでも事實だつたとすれば、今日の南京の少女達は日本人の姿を見るたびに逃げ隠れてしまふ筈だ。漢口にしてもさうである。漢口に踏み留まつた一英國人が、ロンドンにゐる妻に宛てた手紙を私は預つて上海に戻つたが、その英人は私に讀んでも差支へないと言つてゐたからこゝに二、三行引用して見やう。

『僕の知つてる範圍では、漢口占領の日本軍は、軍紀肅然たるもので、僕等の誇る英國の軍隊でもあれ以上に綱紀を嚴守し得るとは考へられない』

蘇州の政廳を訪れた時、私はその前庭に佇む二、三百人の支那青年を見た。何れも體格の優れた頼もしさうな若者である。私はその二、三人に「一體君等はこゝで何を待つてゐるのか」と訊いた。彼等は希望に満ち充ちた眼をあげて「南京維新政府の士官學校入學の手續に來てゐるのです」と答へた。上海の郊外で大激戰があるのも知らず顔に、上海市内の夜の街では、數千の支那青年が每晚ダンスホ

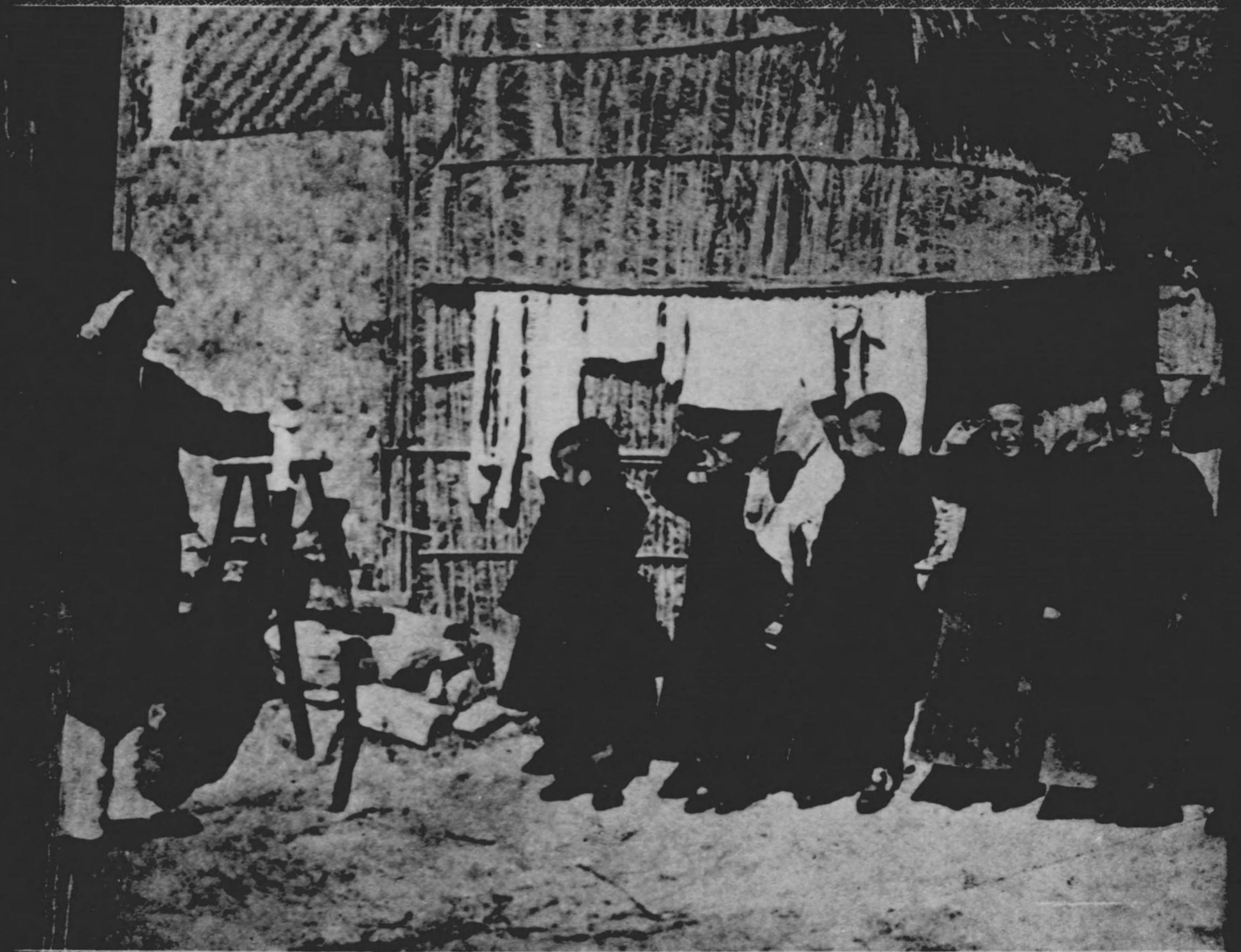
「ルで脂粉の香に耽溺してゐたことを私は聞いてゐた。それやこれやを思ひくらべて私は支那の特殊性を再発見する。」

昭和十三年十二月二十五日印刷
 昭和十三年十二月二十八日發行
 〔非賣品〕
 東京市豊町區丸ノ内三丁目六番地
 編輯者 狩野正夫
 東京市牛込區左内町三十七番地
 印刷者 杉山太郎
 東京市牛込區左内町三十七番地
 印刷所 海外印刷所
 發行所 南洋協會



武漢治安維持會の成立

日米水兵の親善(漢口)



(陽岳) 達供子の那支たつなにし好仲とんざ兵水の本日

1
60